

令和 5 年 6 月 22 日現在

機関番号：34511

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2022

課題番号：18K01017

研究課題名（和文）拓本精査と画像アーカイブ化による突厥碑文の歴史学的研究

研究課題名（英文）Historical Study of the Turkic Runic Inscriptions through Inspection of Paper Rubbings and its Image Archiving

研究代表者

鈴木 宏節（Suzuki, Kosetsu）

神戸女子大学・文学部・准教授

研究者番号：10609374

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、中央ユーラシアの遊牧民史上はじめての文献史料である突厥碑文のテキストを世界に発信してゆくための第一歩である。国内のアクセス可能な複数のキョル=テギン碑文拓本を撮影し、それらを画像処理することで突厥碑文のアーカイブ化を企図した。日本国に所蔵されている、現在のモンゴル国における文化遺産をオープンソースとするための基礎作業である。具体的には広島大学と立命館大学に所蔵されているキョル=テギン碑文の拓本を撮影し、検証可能なデジタル画像を製作した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

国内における網羅的な調査活動にはならなかったものの、可能な限りの拓本調査と撮影により、キョル=テギン碑文の拓本画像については十分な画質の資料を複数得ることができた。これによって、碑文の所在地についての情報、碑文や遺跡についての先行研究のリスト、拓本の版本についての情報などを画像情報にリンクさせることができる。今後の原典史料の検討を可能にする研究材料を斯学に提供できるのであり、研究の基盤を構築できたと言える。

研究成果の概要（英文）：This study is the first step toward expanding to the world the text of the Kol Tegin inscription, which is the first written history sources of nomadic peoples in Central Eurasia. This aims to archive the Kol Tegin inscription by photographing and processing several accessible paper rubbings of the Kol Tegin inscription in Japan. This study is the basic work for open-sourcing the current cultural heritage of Mongolia in the possession of Japan. Specifically, paper rubbings of the Kol Tegin inscription held at Hiroshima University and Ritsumeikan University were photographed, and verifiable digital images were produced.

研究分野：中央ユーラシア史

キーワード：突厥 突厥碑文 古代トルコ モンゴル 遊牧民

## 1. 研究開始当初の背景

突厥とは6世紀中葉から8世紀中葉にかけて現在のモンゴル高原を中心に勢力をほこった古代トルコ系遊牧民の国家である。彼らは、西暦552年、先行する遊牧国家である柔然を打倒すると、遊牧君主・カガンを擁立し、モンゴル高原の覇者となった。その後、周辺に遊牧する古代トルコ系の鉄勒諸族や天山山麓沿いのオアシス都市国家などを支配下に収め、中国の隋唐帝国に対峙した。

この突厥の研究は、おもに東アジアの中華帝国が編纂してきた漢籍史料をもって推進されてきた。2000年代に入ると中華人民共和国の経済発展にともない、出土墓誌資料が多く未知の情報を提供してくれるようになったが、これらの史料はやはり当事者たるトルコ人の手によるものではなく、漢文知識人の手によるものであり、彼ら自身の証言を引き出すという点において課題があった。

一方、19世紀末から古代トルコ語で刻まれた突厥碑文の解読が突厥の歴史を復元する鍵であり続けてきたこともまた事実であった。特にモンゴル高原のオルホン河上流域で発見されたキョル=テギンとビルゲ=カガンの両碑文は、漢文の銘文を備えていたこと、テキストの量がまとまって残存していたこと、それらに加えて両碑文の内容が一部重複していたことにより相互の比較参照が可能であったことなどから、真っ先に解読に供された。両碑文に加えてトニユクク碑文も上述のビルゲ=カガン(キョル=テギンは彼の弟)に仕えた突厥の大臣の墓誌銘であり、あわせて考察されるべき重要なものであった。いずれも8世紀前半の突厥の最盛期に成立したものであり、テキスト相互の関連性が高く、遊牧民自身の生の証言が読み取れることから、特にヨーロッパの言語学者によって解読研究が展開されてきた。

本研究を開始する背景には、これら突厥碑文の原典史料テキストを刷新することにあつた。従来、突厥碑文を扱う研究は、その古代トルコ語のテキストを部分的に抜粋して利用する傾向があつた。それに際しては、突厥碑文の外国語からの翻訳を使用することが一般であつた。つまり原典たる突厥文字一文字一文字から読解した上で考察する研究は稀であつたのである。その理由は、突厥碑文の原典を参照する過程が困難なことに尽きる。関連する資料集は各国で個別に刊行されており、信頼のおける鮮明度や精度を備えたものを博捜するには労を要するからである。例えば、19世紀末のロシアで刊行された上述3つの碑文の拓本を掲載するラドロフ編著『アトラス』〔W.W. Radloff, *Atlas der Alterthümer der Mongolei. Arbeiten der Orchon-Expedition.* St-Petersburg. 1. Lieferung 1892; 2. Lieferung 1893; 3. Lieferung 1896; 4. Lieferung 1899〕は、国立情報学研究所の「デジタル・シルクロード」上に収録されている(<http://dsr.nii.ac.jp/> 参照日2023-05-31)。ところが『アトラス』掲載の碑文テキストにはラドロフ自身の解釈が施されており、これを歴史史料として利用する際には注意が必要であることは周知の事実である。

こうした従来の課題を克服した研究事例が、20世紀末に実施された大阪大学のモンゴル現存遺跡調査ならびに史料調査であり、突厥碑文の多くが拓本資料として採集された〔森安孝夫・A.オチル(編)『モンゴル国現存遺蹟・碑文調査研究報告』中央ユーラシア学研究会、1999年〕。特筆すべきは、こうした拓本が電子上に公開されていることであり、現在、大阪大学学術情報庫 OUKA (<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/> 参照日2023-05-31)で閲覧することができる。こうした資料閲覧上の障壁がより多くの碑文資料で実現されることが希求されているのである。

## 2. 研究の目的

本研究は突厥の基本史料とも言える上記オルホン碑文の拓本画像をインターネット上で直ちに比較検討できる状態に整備することを目的にしている。そして、ただ拓本の画像をストックするだけでなく、碑文の所在地についての情報、先行研究の紹介、拓本の版本についての情報を付記し、史料批判に資するデータベースを構築し、原典史料の検討を可能にする研究環境を提供することを目した。

とりわけ研究代表者が着目したのは、キョル=テギン碑文である。この碑文については、東洋文庫、京都大学、広島大学、九州大学など、国内の学術機関に所蔵された拓本が複数存在する。ただし現状ではごく一部の研究者にしか所蔵が知られていない状態である。ヨーロッパ東洋学、日本の満蒙史研究の系譜を受け継ぐ斯学の資産を継承し、それを有効に活用する方途をひらくために、本碑文の活用は必須なのである。

日本の東洋史学は漢文史料と現地語史料の精緻な読解から大きな成果をあげてきた。本研究は、突厥碑文の拓本という原典史料を基軸に据えるための基盤整備事業でもある。今後一層多くの発見が期待できる漢文墓誌による情報をより鮮明に理解するためにも必要な作業である。あるいは毎年点数や情報量こそ少ないものの突厥碑文の発見は続いている。こうした新たな古代トルコ語のテキストの解読を確実なものにするためにも根幹たるオルホン碑文のデータを構築する作業が必要なのである。

### 3. 研究の方法

そもそも突厥碑文の多くは故人を顕彰するための記念碑として建立されたものであるため、まとまった内容の碑文は数メートル長に及ぶものも存在する。例えば、キョル=テギン碑文の拓本は、テキスト部分だけでも 1.2m x 3m はあり、学術機関に所蔵された装幀済みの拓本を撮影するのは容易ではない。たとえ拓本 1 帳をカメラのレンズにおさめられても、焦点が定まる範囲が限られているからである。拓本を分析可能な一つの完結した画像にするためには専門技術が必要となるのである。

そこで、研究代表者は、外部の専門業者と相談した上で専門家に撮影と画像処理を依頼することにした。分割撮影された写真を画像処理によって統合すれば、テキストの精査も容易になる。また、その画像の複製（レプリカ）を作製し、資料としてのアクセスを容易にすることを試みた。

そして、こうした写真技術を応用できる碑文としてキョル=テギン碑文を選定した。オルホン碑文のビルゲ=カガン碑文とトニユクク碑文についてはそうした画像資料が存在するのであり、特に後者については前述のように WEB 公開されているからである。また、撮影する拓本については、撮影許可を得られた広島大学ならびに立命館大学所蔵のものとした。

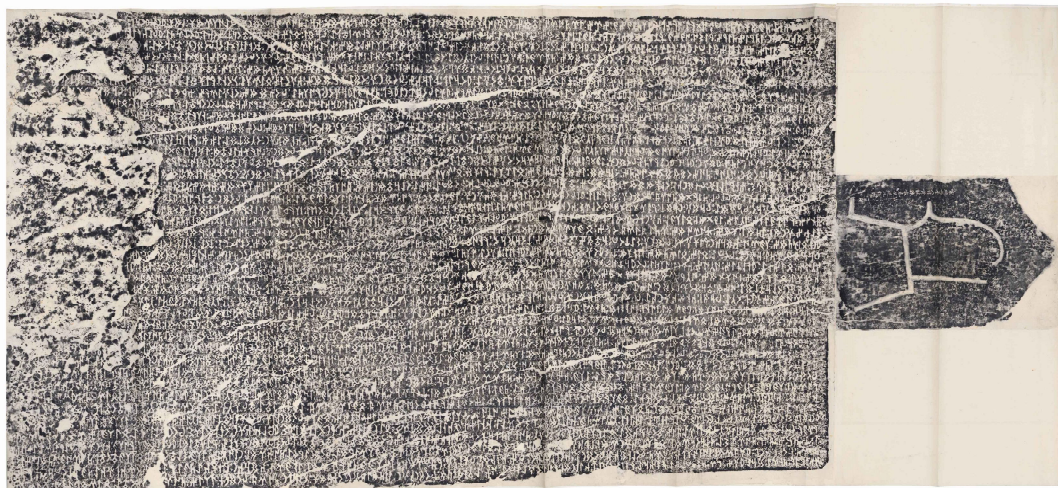
### 4. 研究成果

#### (1) 撮影調査について

- ・広島大学：キョル=テギン碑文 4 帳（東西南北の 4 面）の拓本を撮影
  - ・立命館大学：同碑 2 帳（東西の 2 面）の拓本を撮影（南北の 2 面については同館に所蔵なし）。
- なお、同館所蔵のカラ=バルガスン碑文の拓本 12 枚を撮影することができた。同碑は突厥につぐ遊牧国家であるウイグル可汗国で建立されたもの。12 枚は必ずしも突厥文字の碑文ではないが、学術報告する価値があるため、調査をともにした立命館大学の牛根靖裕氏と拓本の同定作業を実施した。

#### (2) 画像処理の結果

【図 1：立命館所蔵キョル=テギン碑文拓本・東面】



上掲【図 1】のように、画像としてはつなぎ目をほとんど確認できないほど、非常に鮮明に合成することができた。一連の画像をもって碑文テキストの分析作業をするために十分な画質を得たと判断できる。しかし、拓本の現状は必ずしも真っ平らの平面ではなく、長期間保存されていたためのシワが紙面に少なからず存在する。そうしたシワの部分の文字については紙の重なりによって採拓当初の状況を完全に復元できなかった点は想定外であった。また、拓本の経年劣化により判読し難い箇所も存在する。こうした視認性に難がある部分を検証するためには、複数の拓本画像を比較する必要がある。そのため今回、所蔵機関の異なる複数の拓本を画像化することが出来たことは有為であったと判断できる。



【図 2：立命館大学所蔵カラ=バルガスン

## 碑文拓本】

### (3) 今後の展望

COVID-19 流行の影響をうけ、国内における十分な調査活動ができなかったが、可能な限りの拓本調査と撮影により、キョル=テギン碑文の拓本画像については十分な画質の資料を得ることができた。こうした画像による具体的なテキストの分析結果については、後続の研究活動において成果報告を行う予定である。とりわけ、研究計画の時点ではロシアのサンクトペテルブルク東洋写本研究所所蔵のビルゲ=カガン碑文の拓本を調査する予定であったが、海外情勢の変化によって実現はならなかった。

ところで画像資料の外部発信については、立命館大学ならびに広島大学といった拓本所蔵機関との打合せが不十分であり、その方途についても検討する余地がある。あるいは今回の拓本調査で判明した、拓本そのものの経年劣化を補習することも、画像のアーカイブ化の上で重要な課題となる。文化財の修復保存についても今後は考慮して撮影作業を継続してゆかねばならないであろう。

拓本の精査と画像のアーカイブ化は本研究で完結したわけではない。未公開の拓本や新出の碑文拓本についても調査対象を広げ、突厥碑文の網羅的なデータベース化をはかることが今後の課題である。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 0件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 鈴木宏節	4. 巻 37
2. 論文標題 2019年度モンゴル国突厥関連遺跡調査簡記	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 神女大史学	6. 最初と最後の頁 49-68
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 鈴木宏節	4. 巻 238
2. 論文標題 〔 実用と装飾 〕石人	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『アジア遊学（特集 ユーラシアの大草原を掘る 草原考古学への道標 ）』	6. 最初と最後の頁 215-228
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 鈴木宏節	4. 巻 238
2. 論文標題 〔 注目される遺跡 〕	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『アジア遊学（特集 ユーラシアの大草原を掘る 草原考古学への道標 ）』	6. 最初と最後の頁 352-365
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 鈴木宏節	4. 巻 709
2. 論文標題 【歴史と場】第35回 ゴビ沙漠 南北のモンゴルをつなぐ	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 歴史学研究月報	6. 最初と最後の頁 6-8
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鈴木宏節	4. 巻 23
2. 論文標題 漠北回鶻汗國の突厥碑銘 希内烏蘇碑北面銘文的再討論	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 域外漢籍研究集刊	6. 最初と最後の頁 339-352
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 鈴木宏節
2. 発表標題 モンゴル国ドンドゴビ県発現の漢代磨崖文と匈奴 燕然山のその後と龍城
3. 学会等名 東北学院大学アジア流域文化研究所講演会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 鈴木宏節
2. 発表標題 突厥ヒルギシーン=オボ-碑文と八世紀前半のハンガイ山脈南麓
3. 学会等名 2018年度内陸アジア史学会大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 鈴木宏節
2. 発表標題 阿史那思摩 隋唐帝国に翻弄されたテュルク武人
3. 学会等名 「前近代ユーラシア世界における広域諸帝国の総合的研究： 移動する軍事力と政治社会」連続オンラインワークショップ 第2回
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 荒川 正晴、大黒 俊二、小川 幸司、木畑 洋一、富谷 至、中野 聡、永原 陽子、林 佳世子、弘末 雅士、 安村 直己、吉澤 誠一郎	4. 発行年 2022年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 322
3. 書名 中華世界の再編とユーラシア東部 4~8世紀（鈴木宏節「トルコ系遊牧民の台頭」pp. 115-145）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------